阿木城だより

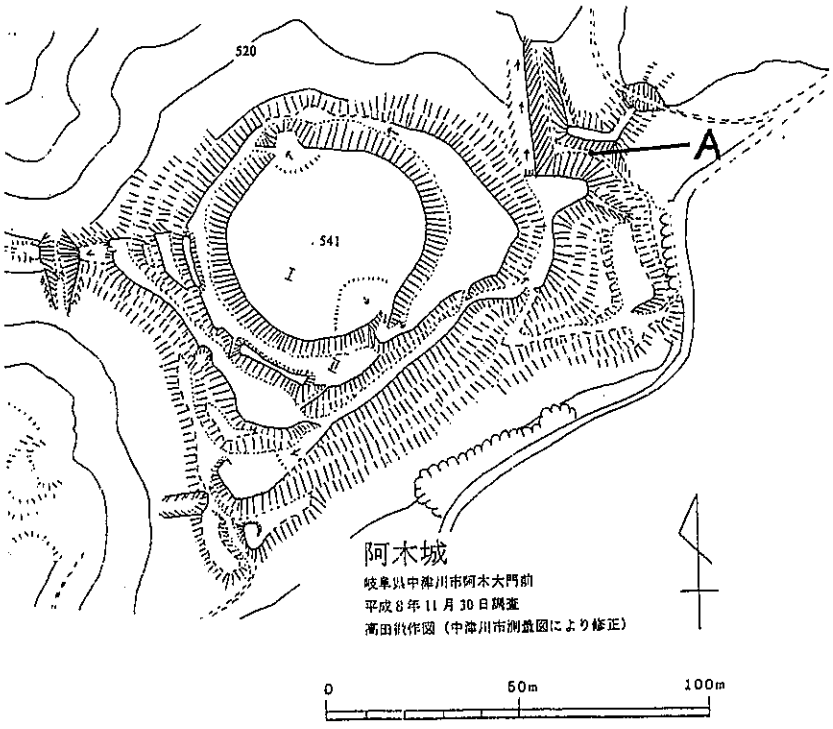
阿木城跡保存会
阿木公民館内
2020年6月発行　NO4

「切岸で囲った山城」の示すもの

阿木城は石垣や塀ではなく「切岸で囲った山城」です。切岸とは人工的に作られた急斜面のこと。下図 ▥▥ がそれで、敵が登って攻めて来れば上部から鉄砲や弓で、あるいは岩や材木などを落として防ぐ施設です。「切岸で囲った山城」ということで、築城年代を一定推計できます。

平清盛、源頼朝、足利尊氏の時代、彼らは館を塀で囲うだけで城を築こうともしませんでした。

時代が進んで応仁の乱（1467 年~1477 年）の時代になると、守護大名は大規模な矢倉や、屋敷を取り巻く堀と土塁を築いて屋敷を要塞化しました。これは「城がまえ」と呼ばれました。土塁は土居とも言い、土をかきあげて屋敷の周りに高く盛り上げた土手状の防御施設のことです。



応仁の乱は今の京都市街で戦われましたが、収まるとやがて戦火は全国に。戦国時代の始まりです。「城がまえ」が全国に普及しました。

天文年間（1532 年~1555 年）の頃の城について司馬遼太郎は「国盗り物語」で「当時の城といえば、国主の居城でも～石垣もなく、濠を掘って土をかきあげた土井と柵程度の設備」と書いています。守護大名・国主といえどもこの程度の城だったのですから、阿木の土豪・国衆がこの当時以前に切岸で囲まれた阿木城を築いたとはとうてい考えられません。

やがて時代が進むと戦の緊張感はよりいっそう高まり、城が山の上へ移ります。

岩村城の場合、今残る遺構はそれまであった城を大幅に改修して1601年から築かれたものですが、初めて山城が築かれたのは1508年頃とみられています（「岩村城跡基礎調査報告書」、恵那市教育委員会発行、2010年）。それまでは岩村町富田の土井に囲まれた館にいた、作った当初は有事のさいに立てこもる所であって、日常の暮らしは富田の館だったと考えられています。

山城は自然のがけや急斜面を利用し、尾根を断ち切って堀とし、切岸などを築きます。防御機能は飛躍的に高まります。この地方では、山城の出現は1500年代初頭以降のようです。

「戦国末期に築城」の根拠

さて阿木城です。県教育委員会の中世城館調査員として阿木城を調べ、市の史跡にふさわしいという報告書をお書きになった髙田徹氏の「阿木城の縄張りについて」の一部を要約・紹介します。

城のからめ手、野内飯沼方面にある横堀（図のA）は一般に見られるように尾根筋に対して直角に交わるように掘られておらず、斜めに交わっており、作業上手間がかかる。あえてそのようにしたということは、戦国末期に阿木城が完成されたと考える根拠になる。――城の構造（縄張り）は時代とともにより複雑になりますが、斜めに交わることは戦国末期なればこそというのです。

また、城を築くには大きな費用がかかります。それでも造るのは、情勢が切迫していること、資金と人を動員する力があることが欠かせません。

切迫した情勢という点では、戦国大名にのしあがった織田信長と武田信玄・勝頼が、この地方で戦国時代の末期に激突した歴史があります。450年前の元亀・天正初期の時代のこと。両者なら資金力も動員力も十分持っていました。阿木城は「地元の勢力では造ることも守ることもできない大きな規模」ですが、織田か武田の勢力の築城なら納得できます。